

# 性器クラミジア感染症の発生動向、2023 年

国立健康危機管理研究機構

国立感染症研究所 応用疫学研究センター

同 感染症サーベイランス研究部

同 実地疫学専門家養成コース (FETP)

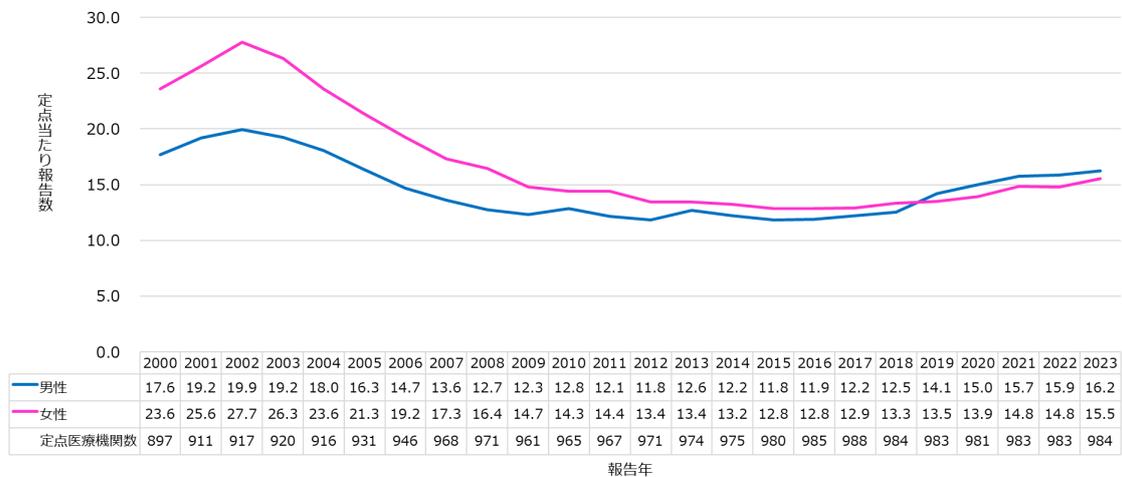
2024 年 10 月 26 日現在

(掲載日：2026 年 3 月 12 日)

性器クラミジア感染症は *Chlamydia trachomatis* を起因微生物とする感染症で、主に、男性では尿道炎、女性では子宮頸管炎を起こす。性器クラミジア感染症は感染症法の定点把握対象疾患で、都道府県が指定した性感染症定点医療機関から感染症発生動向調査に報告されている。性感染症定点医療機関数は 2007 年以降 1000 弱で推移しており、ほぼ横ばいの状態が続いている。性感染症定点医療機関の医師が「症状や所見から性器クラミジア感染症が疑われ、定められた検査方法により診断した」症例について、医療機関の管理者が月単位で届出を行っている。定められた検査方法には、尿道や性器から採取した材料からの *C. trachomatis* 分離・同定、抗原の検出、遺伝子の検出、又は血清からの抗体検出が含まれる。

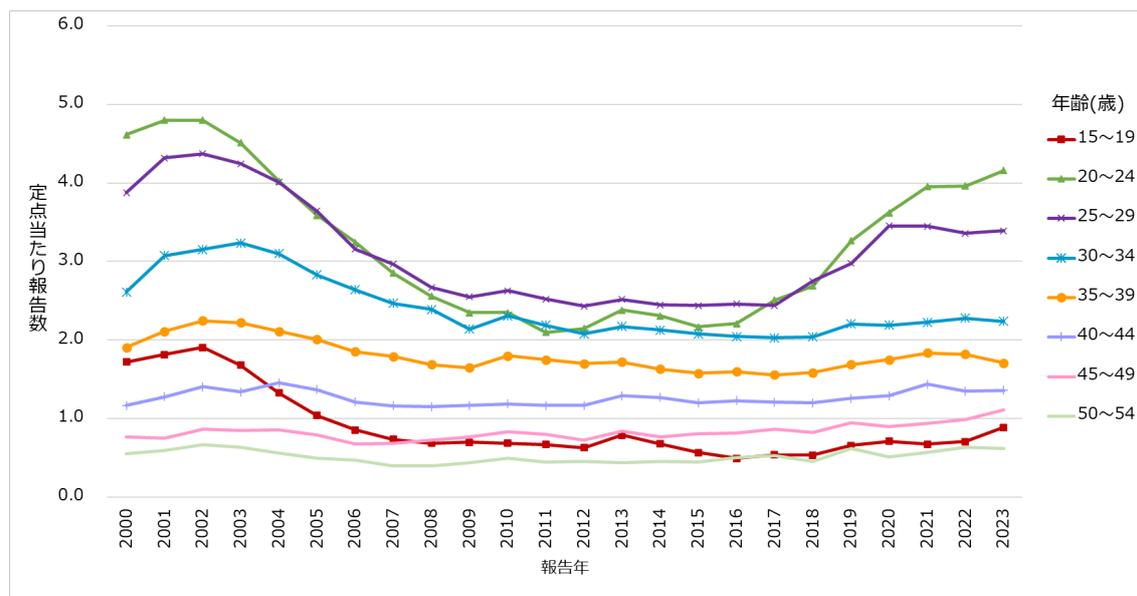
感染症発生動向調査における性器クラミジア感染症の定点当たり報告数は、男性は 2016 年以降、女性は 2017 年以降増加していた。特に 2018 年から 2019 年にかけては、男性で顕著な増加が認められた (図 1)。

図 1 感染症発生動向調査における性器クラミジア感染症定点当たり報告数、2000～2023 年



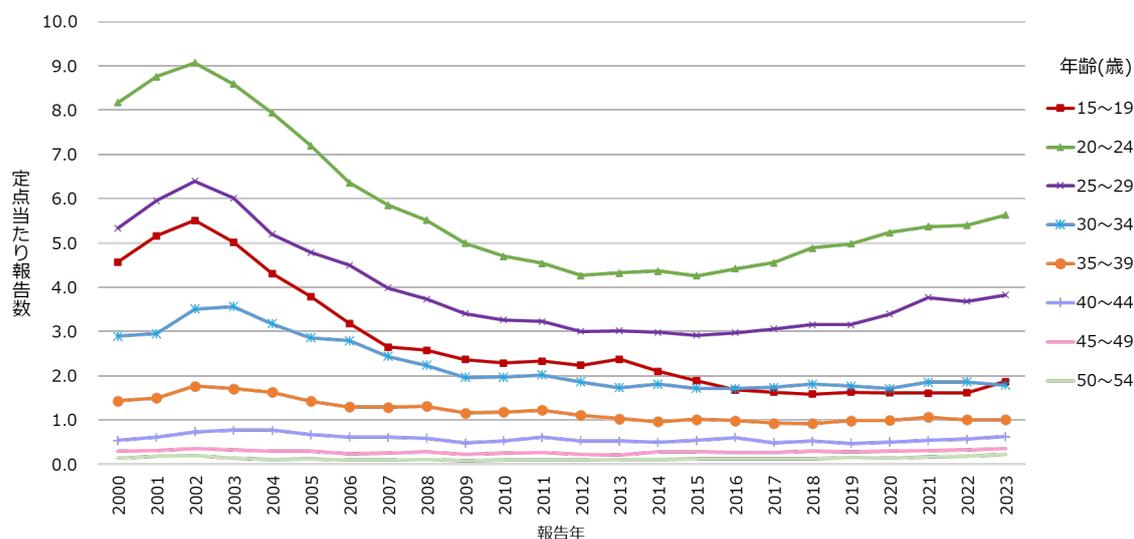
5歳毎の年齢階級別定点当たり報告数は、男性では20代、特に2019年以降は20代前半が最も多かった（図2）。20代全体では2010年以降はおおむね横ばいで推移していたが、2016年頃から増加を認め始めた。この増加は20代前半で特に顕著であり、2023年も引き続き増加が認められていたが、20代後半では2021年以降、横ばいとなっていた。また、10代後半では、2023年に前年比25%の定点当たり報告数の増加が認められた。

図2 男性の年齢階級別性器クラミジア感染症定点当たり報告数、15～54歳、2000～2023年



女性の年齢階級別定点当たり報告数では、20代前半が最も多い状況が続いていた（図3）。2016年以降20代で増加が認められ、特に20代前半の増加が顕著であった。また、10代後半では、2023年に前年比15%の定点当たり報告数の増加が認められた。

図3 女性の年齢階級別性器クラミジア感染症定点当たり報告数、15～54歳、2000～2023年



近年の10代後半、20代で定点当たり報告数が増加していることは、市中における若年者での性器クラミジア感染症の罹患率増加の可能性を示唆している。特に2023年から認められた10代後半での増加は憂慮すべき状況である。国内では若年人口が減少してきていることを踏まえると、若年者における性器クラミジア感染症の罹患率は、より高齢層の人達と比較して、相対的にさらに増加している可能性がある。

この状況を重く受け止め、性感染症に関する特定感染症予防指針に示されているように、コンドームの適切な使用を含む性教育の推進（特に若年者を対象としたもの）、医療機関への性器クラミジア感染症報告数増加の周知、医療機関において診断された患者への安全なセックスの啓発やパートナーの診断治療の推進が重要である<sup>1,2</sup>。

#### 参考

1. 厚生労働省健康・生活衛生局感染症対策部感染症対策課「性感染症に関する特定感染症予防指針」（令和7年11月10日）
2. 日本性感染症学会、「性感染症診断・治療ガイドライン2026」